

記憶の品をたどって

tadotte@asahi.com

5

赤い携帯音楽プレーヤーを見て、少し懐かしくなった。カセットを入れるタイプだ。

中央に「my first Sony」とある。ソニーに聞くと、初めて手にする子どもを狙い、パブル景気の1980年代後半に発売した「キッズ商品」だという。持ち主は、そろそろ40代だろうか。

プレーヤーは岩手県釜石市唐丹町の住宅地跡にあった。防潮堤に守られていたはずの地区は津波で壊滅し、住民は高台に移転した。写真を載せたチラシをつく

り、地区にできた27戸の災害公営住宅の郵便受けに入れてみた。反応はない。

そんな時、長谷川芳枝さん(59)に出会った。近くに住んでいて津波に襲われた。プレーヤーの写真を見てもらったが、持ち主はわからない。ただ、あの夜、頭の中に流れた歌のことを話してくれた。



赤いプレーヤーから流れた歌は

地上は津波で大混乱だった。ふと見上げると「ダイヤモンドをちりばめたような星／いつか話せる日がくるわ」



見つかった携帯音楽プレーヤー。おもちゃ感覚で、懐かしい＝岩手県釜石市唐丹町

中島みゆきの「時代」だ。そういえば、被災地でこの歌詞を口ずさんだという人に、他にも出会った。妻が行方不明の男性、避難や救助の先頭に立った町長……。悲しくて、涙もかれ果てても、「時代は回る」のだろうか。

長谷川さんは再起を誓った。「わらし」（子ども）のためだ。

長谷川さん夫婦は今、盛岡市郊外に暮らす。震災のとき唐丹中学2年だった息子の雄紀さんは、今年1月に成人した。多感な時期に受けた衝撃は消えない。

つも通り、遠距離通学の生徒を乗せて出発した。

同年の女子生徒がバスに乗っていた。彼女は帰宅後、心配して近くの祖母宅に行き、亡くなった。雄紀さんは「なぜバスを止めなかったのか」と自らを責めた。自分のせいではない。でも「無力だ」と思い込む。自宅で過ごすことが増え、高校も中退した。

震災支援で設立された「いわてこどもケアセンター」（岩手県矢巾町）の八木淳子副センター長は、一般論と断ったうえで、こう説明する。

芳枝さんは科学好きな雄紀さんを連れて、東北大学の物理研究室を見学に行った。少しずつ、好きなプロレス観戦やラーメン店にでかけた。

昨年7月、雄紀さんは友人と湖でカヌーに乗った。水で遊ぶのは津波以来初めてだった。運転免許をとりたいた、ともいうようになった。

最近、息子の言葉にハッと

した。「僕のタイヤは普通とは違って四角い。ゴトン、ゴトンときこちないけど、それでも前に進んでいる」人は歩き出す。プレーヤーの持ち主は見つかっていない。もし、できるのなら、これで「時代」を聴いてみたいように思う。（山浦正敏）